

レミリア・スカーレット と紅い夜

猫の住処

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

お父様に会えるなら苦しんでもいい何もいらぬ。そんなこと思っているレミリアを止めることはできるのか

!?

幻想郷が紅に包まれる前に。

目次

壺話 手に入れたもの

—
1

壺話 手に入れたもの

『お嬢様

！』

耳の奥底から呼ぶ声が聞こえる

『お嬢様

！』

呼ぶ声がうるさくてしょうがない。わたしは思わず

「うるさいわね！少しは黙ってられないの!?!」

!?!」

変な夢を見ていたのか自分の宝物と言ってもいいほど大切なメイドにひどいことを
言ってしまった。

「ごめんなさい。着替えるからあっちいって」

「は、はい。失礼します」

ドアを閉める音が良く聞こえる。

「…」

わたしはある人を思い出していた。

「お父様……何で私を捨ててしまったの？わたし……いい子にしてたのに」

レミリアの心は一瞬で悲しみに包まれた。

「ごちそうさま。今日も美味しかったわ」

「うんうん、お姉様は分かかってるね。後で勝負しようよ！」

「ごめんささい。時間がないの」

レミリアはいつも冷たい。まるで南極の氷のように。

「博麗神社に行くわ」

「わ、私も付いて行きますす！」

「いや、咲夜は紅魔館の掃除をしなさい。パチュリー、一緒に博麗神社に行くわよ」

いつもは咲夜が付いて行くはずだ。でも、なぜかパチュリーだった。

「わかったわ。レミィ。準備をするから門で待っててちょうだい」

「ん、わかったわ」

村に出た瞬間セミの声が耳をくすぐる。

「あく……うるさいわね！レミィは大丈夫なの？それより、何で博麗神社なの？」

「……」

「レミィ？」

反応がない。

『レミイ———!』

「パチュリー何か言ったかしら?」

「何で博麗隠者に行くの?」

「行つてら分かるわよ」

「?」

「霊夢ー!レミリアよ!レミリア・スカーレットよ!いたら返事しなさい!」

反応がない。妖怪退治で留守かもしれない。でも、最近は大きな問題はないはずなのだが。

「いないみたいね。早く帰りましょう」

「勝手に中に入るわ。手に入れなくちやいけないものがあるの」

レミリアは靴を博麗神社の玄関にほつて中に入って行つてしまった。

「ちよつと!レミイ!いくら博麗神社でも勝手に入つちやダメでしょ!?!今日のレミイ、何かおかしいわよ!?!変なものでも食べたんじゃないの!?!」

「そんなことない!パチュリーは紅魔館に帰つて!」

やはり何かおかしい。

「……!?!?わかった。もう帰るわ!レミイ、泥棒はほどほどにね!?!」

パチュリーはワープ魔法で紅魔館へ帰ってしまった！

その日の夜
レミアアは

「あが、うぐ…あ…あ…おと…お父様…手に…入れた…やつと…！あが…く、苦…しい…」

レミアアは一体何を手に入れたのだろうか。博麗神社には一体何が

？

『お嬢様
！お嬢様
！レミアア
！』

「わかったわ…起きるから…」

一人の少女がベット中から起き上がる。

「う〜う〜ん！咲夜！この手紙を博麗神社に届けて！」

「あ、わかりました！」

咲夜は急ぎ部屋を出て行った。庭からフランと美鈴が遊ぶ声が聞こえる。今日の夜だ。お父様に会える。苦しんでもいい。何もいらなからお父様に会いたい

！

『お父様
！』